

翻刻 小山正太郎の日記・紀行文八種 (上)

小村 由美子

はじめに

私は平成元年夏、文部省科学研究費補助金による「小山正太郎および不同舎の資料的研究」(茨城大学金子一夫助教授、本学青木茂教授)のお手伝いをさせて頂いた。その折り小山関係文書の多数を見る機会を得た。金子先生の許可を得て卒業論文としてそれらのうち日記・紀行文を提出したい。

小山はその生涯に於ける美術教育の様々な功績によって画家であるよりも寧ろ教育者であるように言われて来た。確かに彼が優れた教育者であった事は事実で、絵画を志してから

僅か二年^(註1)の明治七年に陸軍兵学寮出仕、仕官假学校図画教育掛を拝命したのを初めとし、^(註2)「日本の中等学校図画教員の三分の二が彼の弟子だと言われた」程に日本の図画教育界の中心となったのである。反面、聴香読画館でも工部美術学校でも常に主席の成績を修め、十一会や明治美術会ではその中核的存在であったのにも拘わらず、画家としての彼の作品はほんの少数しか知られていない。そういった訳で彼は今まで描かなかった画家のように考えられてきた。小山の教え子の一人だった中村不折^(註4)は、師が決して描けない人ではなかったししながらも、「ミケランジェロは自分の画をその先生に見て貰って腕を磨いたと云う事であるが、彼の先生は無名の画家に過ぎなかった。併し其先生は非凡な頭を持っていた人だったのである。」^(註5)という例を挙げているから、やはり画家とし

ての小山よりも教育者としての彼の功績を称えていたように思われる。しかし画家として小山は非凡な頭だけでなく非凡な腕も持っていて決して無名ではなかった。だから我々は、彼を美術教育に於ける功勞者としてばかりでなく、一人の人物としてもっと考えていく必要があるように思われるのである。

万巻ノ書ヲ讀ミ千里ノ道ヲ行キ而シテ後ニ画ナルト

これは小山正太郎によって記された「武蔵野紀行緒言」(明治二十五年四月)の初めの一文である。

師範学校教員時代の強行軍的遠足や不同舎時代の写生旅行等彼が教育者として同行した旅行については、当時の記事や多くの人々の回想文等が残っているのでその内容は知ることが出来るけれども、小山個人の面は余り知ることが出来なかつたように思われる。そうした中、私は幸いにして小山の残した日記や数多くのスケッチを目にする機会を得た。日記というものが果してどれだけ真実であるか、知る由もないがそこには確かに彼の多くの風景スケッチに見られる、自然への開かれた眼を感じることも出来るし、何より小山の当時の生活を読むことが出来る。

先に掲げた一文はそうした日記の一つに付けられた序文のようなものである。「在来の画描きには随分無教育のものも多かつたが、今後の画描きは相当の学識も備へていなければ

いけない、だから余暇には屹度読書を怠つてはならぬ」と指導した小山のそれは、座右の銘であつたとも考えられる。彼は美術を学問の一つではなく総合的な学問であると考え、単に技術的に秀でることではなく広い分野での教養を以て画を描くことを目標とし、それは彼の師であつたフォンタネージの「絵画とは決して眼の前にあるがままのものではなく、知識や記憶によつて得たものを引き出し、現実の刺激によつて最後に一つの画面にイメージを再構成するもの」という教えにも通じるものであつた。フォンタネージはまた写生について「どこにこれから写生に行くのだとは思わないで、何となく歩いていろうちによい場所を選ぶのが良い」と教えている。小山の風景スケッチにはどこにもありそうな風景を描いたものが多いが、これは師の教えから得た部分もあるのかも知れない。

こうした「万巻ノ書ヲ讀ミ千里ノ道ヲ行ク」事を目標とした小山を志高かつた近代人として、彼の日記・紀行をもとにして紹介をして行きたい。

〔註〕

(1) 小山が画を志した年代については、参考にする文献によつては明治四年のものもある。しかし今回私は小山本人の「履歴略」により明治五年とした。

(2) 小山は既に明治六年から川上冬崖の助手の様な形で兵学寮

に出仕していた。ここで「初め」としたのは彼が一応教育的立場に立った事である。

- (3) 『近代日本洋画素描大系1 明治』（陰里鉄郎編 昭和六十年 講談社）の三輪英夫氏や『油絵初学』（青木茂 昭和六十二年 筑摩書房）で青木茂氏が用いている文章を孫引きした。

- (4) 明治二十一年に不同舎に入門。

- (5) 雑誌『中央美術』（大正五年二月一日発行）十二頁より抜粋。この号は小山追悼の特集号となっている。

- (6) 東京師範学校に明治十一年より二十三年迄、高等師範学校に同十九年より出仕。

- (7) 雑誌『中央美術』（註5を参照のこと）石川寅治による回想文の十四頁から抜粋

- (8) 井関正昭著『画家フォンタネージ』（中央公論美術出版 昭和五十九年）二〇六頁より抜粋。

- (9) 註8の文献と同じ。これは、高橋由一に行つた講義中の言葉であるが、工部美術学校での講義に於いても同じ内容の事を言っている。

なお、原稿化するに当たって、それぞれに題名を付した。殆どは巻頭に書かれているものを今回の題名として用いている。表紙に別の表現で題が有る場合等は、「註」に示しておく。

又翻刻する際、漢字は常用漢字とし、仮名づかいは原文のままとした。但し漢文体で書かれている「遊小金井記」・「漫遊紀行第一入峽記」については、返り点をつけてある。句点の欲しい箇所には

この二つの紀行については句点を付し、他の日記・紀行では一字分空けた。

今回はページ数の都合で八種のうち三種を掲載する。いずれも、批正を待つものばかりである。

避暑学静日記

余性幽静ヲ好ミ常ニ俗事ノ為ニ塵世雜沓中ニ在ルヲ苦ム

今茲夏日三旬ノ暇ヲ得 将ニ幽閑ノ地ヲ択ヒ暑ヲ避ケントス 偶家弟吉モ亦工部大学ノ休業ナルヲ以テ旅寓ニ帰ル 而シテ

校則休業中洛中ニ寓スルヲ許サズ 亦将ニ幽閑ノ地ヲ択ヒ暑ヲ避ントス 乃チ之ト暑ヲ目黒ノ山寺ニ避ク

明治十一年八月一日 早起 行装ヲ為シ三〇〇連ネ新ッ橋外

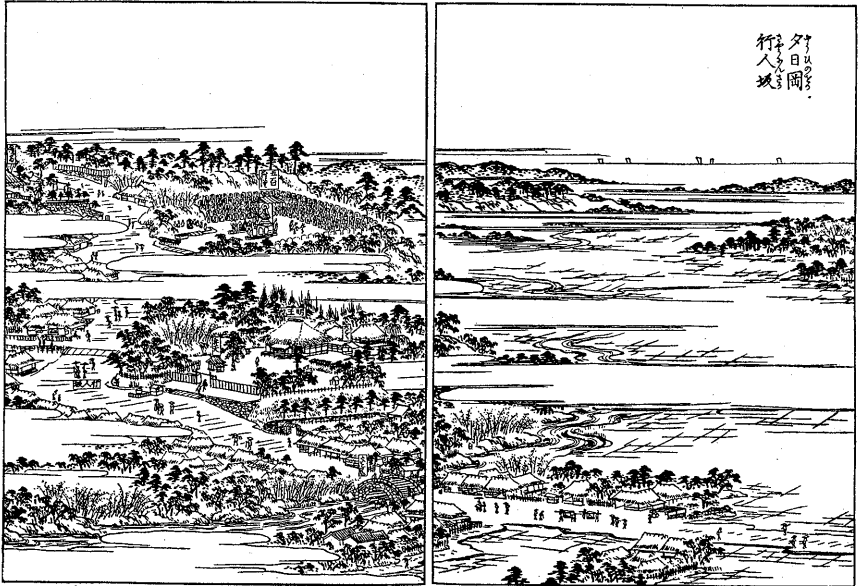
ノ旅寓ヲ発ス 先是学友望氏吾カ為メニ幽静ノ地ヲ択ヒ周旋至ラザル無シ 於レ此家弟ヲシテ先ツ寺ニ往カシメ 余途ヨリ望氏ニ至リ厚志ヲ謝ス

寺ハ下目黒村十一番地ニ在リ 松樹山明王院ト云ヒ天台宗

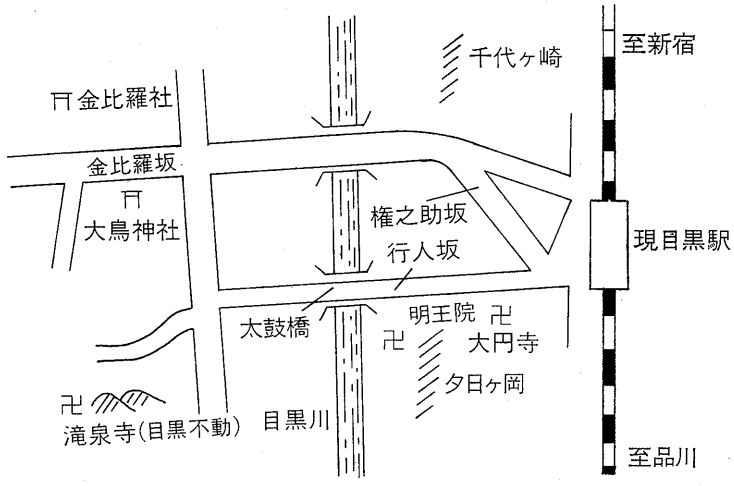
ニシテ上野東叡山ノ派ナリ 院ハ山腹ニ在リ 東北山ヲ帯ヒ

西南平田ヲ纏ラス 山頂ヨリ東方大森鈴ヶ森ノ処刑場ヲ望ム 彼ノ八百屋於七ノ鈴ヶ森ニ刑セラルルニ及ヒ 情郎吉三此処

ニ其冥福ヲ祈ルト云フ 後チ薩侯為メニ此寺ヲ建立シ 当時頗ル華麗ニシテ詣塞ノ人モ亦向背相望ム 今ヤ則チ堂門傾キ



『江戸名所図絵 卷之三 天磯部』より



粉壁破レ金銀剥落シ雑草繁茂ス 從テ行人モ亦其何寺タルヲ知ラス 然レトモ尚ホ今ニ依然トシテ吉三薩侯ノ兩像ヲ安置ス 吉三ノ像ハ剃頭縮衣諸国行脚ノ状ニシテ好男子タルヲ認ムル能ハズ

寺ハ院主老尼二人而已 絶テ人跡無シ 最吾カ幽閑ノ意ニ適フ 乳燕ノ扇額ニ巢ヘ 樓欄巨竹ヲ用ユル等百般ノ事皆ナ雅ニシテ野趣ニ乏シカラズ 而シテ地形最モ眺望ニ宜シ 樓又南西北ノ三面ヲ開キ以テ眺望ヲ縱マニス 樓前湧泉アリ 石筒盛ル之 溢レテ小池ヲ為シ老桜枝ヲ垂レテ之ヲ掩フ 池瓢形ヲ成シ 中央土橋ヲ架シ橋下金魚ヲ畜フ 池ノ左リ菖蒲多シ 其左リ山腰絶壁ヲ成シ雑草掩垂ス (この欄外に「絶壁ノ上平坦ノ処アリ 之ヲ夕日ヶ丘ト称ス 江戸名所図会中ニ見ユ」とあり) 岩上老松アリ 臥龍松ト名ツク 枝ヲ垂レ斜ニ庭ヲ掩フ 略々五十畳 紫陽花根ニ纏フテ花正ニ開キ 岩下蓮池アリ 寺ノ東北ヲ繞ル 又竹林アリ 其上ニ在リ 以テ山腰ヲ裏ム 又中央土橋ノ右キ方六十歩 花園ヲ作ル 桔梗腐醬^{ハシ}合正ニ満開 其他洋種ノ雑草百般 紅白紫黄芳菲ヲ鬪ハシ美麗実ニ筆紙ニ尺シ難シ 桜梅柳李又其四面ヲ環リ 枝媚ヒテ尚ホ密ナラス 幹老ヒテ尚ホ大ナラズ 而テ青苔能封ス 其北芭蕉アリ 又雨ニ宜シ 階下ヨリ小池ノ畔リニ至ル 芝茵ノ如ク淨フシテ履ヲ用ス 京地ノ得難キ所最モ愛ス可シ 階前ノ一方ニ小壇ヲ作り珍花異草ヲ貯フ 而シテ園中

縦横小径ヲ通シ納涼ス可ク吟行ス可シ (この欄外に「門内ニ三株ノ老松及ヒ百日紅ノ最モ愛ス可キ者アリ」)「園中処々葡萄棚多シ」とあり) 樓前地形ノ大略如此 而シテ玉川ノ支流庭園ヲ匯リ北品川ニ落^シ 其左リ山アリ 万松之ヲ裏ミ翠リ天ヲ衝ク 樓正面流レテ踰ヘ青田ヲ隔ツ半里許リ不動ノ深林アリ 翠色山ノ如ク横サマニ天末ヲ遮ル 其麓ニ村アリ 茅屋参差 雜樹中ニ処々屋背ヲ露ハス 村後山アリ 連綿断ヘス 漸ク南シテ漸ク遠シ 不動山ノ北ニ村アリ 村ヲ隔テテ小山アリ 小山ヲ隔テテ祐天寺アリ 松杉森々夕陽ニ立ツ 樓前ノ小流ヲ遡ル約五六町 水車アリ 終夜声ヲ絶タス 之ヲ下ルモ亦水車アリ 樓前ノ眺望略如此 其他朝夕晴雨変化千万 好景勝ケテ云フ可カラス 食器皆ナ大古ノ風アリ 膳碗朱塗リニシテ処々剝落ス 老尼黙懃ニ盆ヲ捧ケテ給仕シ椀類皆ナ蓋アリ 而シテ其中ハ則チ茄子ノ味噌汁ニ過キズ 余曾テ幼時兵乱ニ逢ヒ兄弟父子離散シ 独リ北越ノ山寺ニ匿レ以テ難ヲ遁ル 於レ此忽チ懐旧ノ情起ル 此夕院主ノ前導ニヨリ近隣ノ湯亭ニ往キ入浴ス 浴室方二間 二面硝子障ヲ用ユ 恰モ邈卒^{ハシ}張所ノ如シ 湯亭又紙券ヲ売ル 入浴スル者皆ナ之ヲ贖フヲ以テ利トナス 十銭ニシテ二十五枚ヲ贖フ可シ 夜燈下書ヲ読ム 蟬アリ 燈ヲ見テ入ル 亦京地ノ稀ナル所 二日 微雨 終日晴レズ

三日 雨風 樓前ノ芭蕉為メニ折ラル 晩ニ及テ少シ晴ル
富岳林端ニ現ハル 昨日ヨリ雨ノ為メニ閉ヂラレ散步スル能
ハズ 此ニ至リ始メテ散步スルヲ得 直チニ白金台町ヲ通キ
清正公社前ヨリ左折シテ入り三光坂ヲ登テ帰ル 夜市氏来リ
訪フ

四日 早起 東京ニ至リ川上先生ノ居ヲ訪ヒ 山寺避暑ノ
事ヲ告ク 午後驟雨至リ黄昏寺ニ帰ル 此日家弟モ亦小石川
日暮シノ各処ニ至ル 故ニ朝ヨリ戸ヲ開カズ

五日 復テ東京ニ至リ断髮ス 昨日雨ノ為メニ遅刻シ断髮
スル能ハザルヲ以テナリ 薄暮入浴ス

六日 開晴 燕朋松望二氏来リ浅山両氏モ亦来ル 相共ニ

談論ス 或ハ囲碁ヲ為スアリ 或ハ山ニ攀ルアリ 寺ハ固ヨリ
小院地偏人不致、滿庭鳥跡印蒼苔、ト云フガ如ク 園ハ石老
苔為藪、松寒薛作衣、ト云フニ似テ 樓ハ又為月窓從破、因
詩壁重泥、ト云フニ似タリ 実ニ自有山林趣、都無市井喧、
ナリ 而シテ樓下百花ノ間眉雪ノ老僧花ニ灌グ 正ニ人は人
非都不問、花開花落尚関心、ト云フ趣ナリ 実ニ人ヲシテ仙
境ニ入ルノ想ヲ為サシム 而シテ樓上竹楹ノ中ニハ蒼顔ノ丈
夫天生我方必有用、ト云フガ如ク磊落甚ヲ困ム 恰モ対局爾
然両無語、箇中君子有争時、ト云フ句ノ如シ 実ニ諸葛草廬
ノ想アリ 人ヲシテ三顧スルノ人アル可シト疑ハシム 午後
相携ヘテ千代ヶ崎ノ瀑布ニ遊フ 瀑布三条中ナル者最モ大

左ナル者稍小ニシテ右ナル者最モ小ナリ 大ニシテ高キ東京

ノ最ト云フ 茶店ニ軒客ヲ喚ヒ茶ヲ喫セシム 飲ム可ク食フ

可シ 此滝客年初メテ作ル処ニシテ 樹木ノ日ヲ覆フ可キ無
シト雖モ眺望頗ル佳ナルアリ 瀑布ニ浴スルノ後チ白金ノ一

茶店ニ入り食シテ帰ル 縦横座臥 清談古今ヲ交ユ 過午又

不動ノ瀑布ニ遊フ 水少フシテ衆浴ス可カラズ 乃チ又復タ

千代ヶ崎ニ遊ヒ浴ス 浅山二氏途ヨリ東京ニ帰リ松氏吾ト寺
ニ帰ル 弓箭アリ 戯レニ山鳥ヲ射ント欲レトモ弦断テ奈シ

トモスル能ハス 薄暮 望氏ノ先導ニ由リ山ヲ踰ヘ上大崎村
ニ至リ弦ヲ求ム 弓工已ニ他ニ移リ寂トシテ跡ナシ 衆大ニ

望ミヲ失ヒ路ヲ田間ニ取テ帰ル 日已ニ西山ニ没シテ 片月
天ニ在リ 田々総テ月ヲ浸シ蛙声徑ヲ挾ンテ沸ク 此夜松望

二氏我寺ニ宿ス 少女アリ 門ヲ扣キ吾ニ見シコトヲ求ム
老尼曰ク年紀二八左右 吾以テ人違ヒト為シ 其名ヲ問ハシ

ムレハ 則チ工作局長大鳥君ノ女一侍婢ヲ從ヘ月ニ乗シテ来
リ訪フナリ 樓上客アルヲ見 入ラズシテ帰ル 偶々浮雲月

ヲ籠メ咫尺暗黒 余其厚意ヲ謝シ為メニ送テ行人坂上ニ至ツ
テ別レ帰ル 松望二氏家弟ト甚戦ス 夜將ニ半バナラントシ

テ月雲間ニ落チ 遠村風燈明滅ス 四隣無声 虫鳴益々大ナ
リ 夜窓人静四無声、起擁疎簾引月明、一局残碁尚未斂、滿
階虫韻已三更、ノ句 今夜ノ写真ナリ

七日 朝霧甚タ深く遠近冥漠トシテ有ルガ如ク無キガ如シ

須臾ニシテ雲霧漸ク薄ク 翠色一帶天末ニ横ハルヲ見ル 兵
ノ如ク林ノ如シ 日出テ雲霧尽ク散スルニ及ヒ 軍隊ニ非ス
シテ皆遠近ノ諸山ナリ 甲將越軍ヲ見テ林トシ爲^{（ムシ）}□□□□將
士関東勢ヲ見テ村落ト爲スモ亦タ宜ナル哉 此日頗ル秋冷ヲ
覺ニ 単衣ヲ重ネ尚ホ寒シ 近午松氏東京ニ帰ル 此夕鷄卵
ヲ求メント台町ニ往キ雨ニ逢フ 夜ニ及ンデ益々大雨
八日 雨未タ止マス 近午晴ル 過午物ヲ求シ爲メ三田ニ
往ク 途ニシテ学友浦市敬^{（註）}二氏ニ逢フ 薄暮寺ニ帰ル 初メ
此寺ニ来リシヨリ肉類ヲ食ハザル一句 心神ノ疲労ヲ懼レ鷄
卵ヲ求^{（求ム）}メテ食フ 而シテ寺法食フヲ許サズ 故ニ院主ニ秘シ
密カニ紙其殼ヲ包ミ門前路傍ニ棄ツ 此夕入浴ノ帰途之ヲ見
レハ隣家ノ墻中ニ在リ 是必ス隣人拾ヒ取り其卵殼ナルヲ以
テ復タ投スルナル可シ 此日浦市二氏我居ヲ訪ヒ 我未タ三
田ヨリ帰ラザルヲ知リ入ラズシテ去ルト云フ 地固トヨリ僻
ナルヲ以テ鳥雀人ヲ畏レズ 余家弟ト書ヲ読ムニ尚ホ室ニ入
リ梁上ニ語ル 又山蟬最モ多シ 簷端ニ棲ミ常ニ樓欄ニ鳴ク
幽趣想フ可シ 村童竹枝ヲ曲ケ蛛網ヲ取り以テ蟬ヲ擒フ 往
々群ヲ作シテ来ル

九日 朝 霧晴レズ又雨ナラズ 午ニ至ツテ全ク晴ル 望
氏家弟余ト三人 太鼓橋ヲ渡リ左折シテ田間ノ草徑ヲ往キ
大崎村山寺ノ門ヨリ山麓ヲ繞テ東行シ 遠ク品川硝子製造所
ノ烟ヲ望ム 夫レヨリ又山ニ傍フテ左折シ 雉子宮社前ヲ過

キ猿町坂ニ登ル 雉子宮ハ昔シ慶長ノ頃徳川將軍放鷹ノ時
雉アリ飛テ此社ニ入ル 將軍之ヲ望ミ祠名ヲ問ハル 土人答
ルニ山神ヲ以テス 將軍笑テ曰ク 今ヨリ雉子宮ト称フ可シ
ト 是則チ此名アル所以ナリ 坂上ニ至リ弓弦ヲ求メ 別路
ヲ取り緩歩シテ帰ル 寺嶋氏ノ邸前ヨリ白金台町ニ至ントス
ルノ間水車二軒アリ 一ハ路上ニアリ 仰テ礎ヲ見 一ハ路
下ニアリ俯シテ屋梁ヲ見ル 水上車ヲ過キ奔雷雪ヲ噴キ 路
下ヲ貫キ直射シテ下車ニ灑ク 水勢頗ル疾シ 雜樹繁茂 上
車ノ柱下ヨリ路ヲ掩フテ垂ル 下車ノ^{（ムシ）}面皆ナ小山ナリ 亦
灌木叢生シ田無畑無シ 実ニ深山ノ趣ヲナス 帰テ後チ弓弦
ヲ張り 山上ノ羅漢堂ニ至リ荷葉ヲ的トナシ試ミニ射ル 甚
タ快ナリ 此羅漢堂ハ堂宇半ハ破壊シ門常ニ閉チテ塞人ノ至
ルナク 守者モ亦タ去テ床上蛙声アリ 然レトモ老桜梢ヲ連
ネ密芝階ヲ繞ル等 又往時ノ盛ヲ見ルニ足ル 地モ亦高燥ニ
シテ眺望佳ナリ 風雨ニ委ヌ 又誠ニ惜ム可シ 此地二十年^{（不明）}□
繁榮 名所図会ヲ見テモ知ル可シ 而シテ今吾カ戲射ノ場ト
ナル 嗚呼又時ナル哉 此夜月色昼ノ如ク滿天一片ノ雲ナク
虫声更ニ清シ 夜座月光ヲ引^{（マツ）}ヘテ書ヲ読ム

十日 用アリ 早起シテ川上氏ニ往ク 午時美術校ニ至リ
三脚揚ヲ借り 返テ新ッ橋ノ旧旅寓ニ至リ午飯ス 偶々金刀
比羅ノ月祭ニ當リ塞人雜沓ス 午後二時車ヲ走ラシテ帰ル
此夜望氏吾ニ大西瓜ヲ贈ラル 望氏ノ弟五郎君之ヲ抱ヘテ来

ル 因テ又月光ヲ引ヘテ棋戦ス 月色明朗昨夜ノ如シ

十一日 晴 家弟東京ニ往ク 余望氏ト又タ戯レニ射ル
午時微雨至ル 暫時ニシテ止 家弟帰ル 午後雨復タ至ル

遂ニ晴レズ 遠近ノ山色空濛トシテ実ニ東坡ノ雨モ亦タ奇ナ
リト云ヒシモ虚ニ非ス 樓前数里ノ青田ニ白鷺飛来ル事多ク
レバ殊ニ趣ヲ添ユ 園園敵ノ雨映寒空半有無ト云ヒシハ当サニ
如レ此ノ景ナル可シ 真ニ浅深山色高低樹 一片江南水墨圖

ナリ 不動ノ晚鐘昏ヲ報スルニ及テ農人鋤ヲ荷ヒ雨ヲ衝テ帰
ル 騎ルアリ歌フムシ 正ニ是レ村路泥深多滑馬、晚樓霧重
只聞鐘ナリ 此夜雨ヲ聞テ眠ル 階前ノ蕉葉終夜声アリ

十二日 昨日より霧の如き雨ふりつゝきてをとつる人なく
いとわびしければ

淋しさに友かとはかり出て見れば

門の戸はらふ松の下采明

又

我思ふ人に見せはやもろとも

目黒の里の夕くれの空

なと口すさみ侍りけるほどに はや七ツ下りにもなりぬとて
やかて食事もすみ 二階よりこゝかしこを詠れば 入りあひ
告る鐘の音に往きかふ人も跡たへて 暮れ行空も霧ふかく
今宵は十三夜の月なれとそれだに見えぬばかりなれば ち草
にすだく虫の音もいとこころほそくぞきこへける をりしも

門のしをり戸うちたゞき望月主のたつね来て よもやまの事
浮世のはなしなどくさぐさものがたりければ 此夜はこれに
て旅のうさをぞなくさめけり

十三日 日出テ朝霧尚ホ深シ 近午晴レテ過午又タ雨フ
ル 吉郎鶏卵ト砂糖トヲ求メテ帰ル 黄昏雨止ミ雲斂マル
終日更ニ風ナシ 故ニ雨中モ尚ホ夕陽窓ニ入り暖簾ヲ以テ遮
ルニ至ル 夜望氏来り宿ス 月色明朗

十四日 此日甲子ニ属シ 吾寓ニ大黒神アルヲ以テ塞人ノ
雑沓セン事ヲ畏レ 望氏及ヒ家弟ト三人相携ヒテ世田ヶ谷駅
ノ豪徳寺ニ遊フ 午前第九時寺ヲ出テ路ヲ田間ニ取リ 西行
スル事十丁余 迷テ道ヲ失ヒ一ツノ小祠ニ出ツ 大杉枝ヲ交
ヘ直立スル事数丈 相去ル咫尺僅カニ傘ヲ通ス可シ 正面ノ
小社半ハ破壊シ 社前ノ杉林中ニ小華表アリ 八幡宮ノ額掛
ク 寂寥肅然人ヲシテ自ラ空言ノ事ヲ想像セシム 祠後ヨ
リ畑疇ヲ涉リ辛フシテ路ニ出ツ 草露衣ヲ湿ラス 西行スル
丁余 又左折シテ南行シ明頭山祐天寺ニ至ル 此寺ハ享保年
間ニ僧祐海 其先祐天ノ遺跡ノ地ヲ奉シテ草創スル所ナリ
二王門ニ掛クル草書明頭山ノ額ハ即チ祐海ノ書ナリ 鐘樓最
モ華麗ニシテ鐘ニ祐海ノ書ニテ銘アリ 経堂盃水等皆ナ美ナ
リ 而シテ寺蔵宝物中ニ見ルニ足ル者アリト云フ 其レヨリ
畑中直路將ニ世田ヶ谷ニ至ラントス 途中土橋アリ水車アリ
字ナ三軒茶屋ニ出ツ 路チ丁字ヲ為ス 今ヤ其名ニ背キ茶店

二軒アル而已 此レヨリ左折西行スル五町許リ 常盤橋〔ムシ〕至リ古跡ヲ弔フ 橋ハ僅カニ小溝ニ架スル小石橋ナリ 故ニ知ラザル者多シ 昔シ吉良頼康ノ妾常盤ナル者 故アリテ此所ニ害セラル 故ニ斯ク名ク 里人其靈ノ崇セン事ヲ畏レ弁天ニ祀ルト云フ 橋ノ東方二十歩ノ地ニ塚アリ 是ヲ常盤ノ墓ナリト云フ 夫レヨリ復タ道ヲ誤リ返ル事十丁余 氷川明神ノ祠ニ出ツ (府下ニ氷川ノ社多シ 是ハ上目黒村ナリ)ト割註) 祠ハ山頂ニアリ 石燈高キ事百尺 祠後ニ所謂ル駒場ヶ原ヲ負ヒ前ニ小流ヲ帯ヒ麓ノ路傍ニ水車アリ 喬松枝ヲ交ヒテ社ヲ匯リ翠リ天ヲ衝ク 樹間眺望最モ佳シ 遙カニ祐天寺ノ深林千代ヶ崎ノ孤松ヲ望ム 〔ムシ〕ナ老大ニシテ三人之ヲ囲ム可シ 芝根ニ纏ヒ燈ヲ挟ミ最モ愛ス可シ 樹皆ナ高キガ故ニ松籟爽然トシテ清涼ヲ覺ユ 吾輩石碑ノ横ハル者ニ踞ンテ息フ 山下下リ復タ西行ス 路傍ノ小茶店ニ入り梨子〔空百〕ヲ食ヒ又タ行ク 是レヨリ先キ常盤橋ノ傍ニテ 数十頭ヲ捕ヒ糸ヲ以テ各々傘端ニ約シ恰モ〔ムシ〕三軒茶屋ノ前ヲ過ル已ニ二回 至レ此復タ又過ク 児女皆ナ顧ミテ笑フ 午後二時稍ク世田ヶ谷ニ至ル 世田ヶ谷ハ駅ナリト雖モ市肆ノ如キモノ無〔ムシ〕 僅カニ兩三軒ノ茶店アル而已 尋常村落ニ異ナラズ 茶店中最モ大ナルモノ一軒 料理ヲ命ス可シ 而シテ蕎麦アリ 蟹文ヲ以テ *Kisoda* ト記ス 頗ル奇ナリ 大溪山豪徳寺ハ村外北方ノ田間ニアリ 古ヘ弘徳寺ト云フ 遺命ニ

由リ井伊直孝ヲ此ニ葬ル 爾來其法名ヲ取り豪徳寺ト云フ〔証15〕 前ニ高丘ヲ抱キ後ニ深林ヲ負フ 丘ハ方丁余 灌木叢生ス 吉良氏ノ城跡ナリト云フ 溝墟ノ跡及ヒ筑造基礎ノ跡アリ 是ヲ望岳丘ト名ツク 富岳ヲ望ム可シ 今ヤ半ハ開〔空百〕シ桑ヲ種ユ 本堂ト称スル者頗ル支那筑造ノ風アリ 尋常〔空百〕非ス 内部広弘ニシテ地皆ナ方石ヲ鋪キ佛像中央ニ直立シ 左右ノ後壁ニ棚アリ 数百卷ノ經ヲ積ム 戸口モ亦タ大ニシテ左右前ノ三面ヨリ出入ス可ク 〔空百〕亦タ皇國ノ風ニ非ス 戸口總テ上ニ額アリ 左右ニ〔空百〕アリ 其他堂内ノ柱ニモ畢ク〔空百〕ヲ掛ク 佛像左右ノ壁ニ掛クル所ノ〔空百〕明朝風ノ細字ヲ刻シタルナド最モ古風アリ 其他門ノ左右ニ在ル所ノ石燈ニ至ルマデ其形チ奇異ニシテ總テ趣キアリ 門内ニ愛ス可キ老桜アリ 之ヲ臥龍桜ト名ツク 寺ノ左リ深林中ニ楓樹多シ 是ヲ楓樹林ト名ツク 古ヘ林下ニ門アリ 之ヲ碧雲閣ト名ツクト云フ 今已ニ破壊ス 林端ニ塚アリ 其上ニ石碑ヲ建テ座右首碑ノ三字ヲ刻シ其下ニモ亦碑アリ 川田剛ノ文ニシテ日下部東作ノ書ナリ 以テ座右首碑ノ所以ヲ記ス 之ヲ読ムニ旧彦根ノ藩士列藩ノ兵ト合シ上州小山駅ニ於テ幕兵ト戦ヒ大敗シテ走ル 其時斬殺セラル所ノ十一名ノ墓ナリ 井伊氏幕府ノ恩遇ヲ蒙ルノ厚キ親睦無二ノ家系タル事ハ衆人ノ知ル所ナリ 而シテ幕府朝敵ノ名ヲ蒙リ御親征ノ詔天下ニ下ルニ及テハ一ノ哀訴スル無ク一ノ嘆願スル無ク袖手傍觀シテ以テ己レノ

難ヲ避ク 義ト云フ可キカ勇ト云フ可キ乎

宣ヘナル哉 大軍ニシテ加フルニ列藩ノ大兵ヲ以テシ 尚
ホ寡少孤軍ノ幕兵ニ擊破セラル事

塚ノ左リ松柏多シ 古ヘ此下ニ壇アリ 之ヲ松柏壇ト名ツ

クト云フ 此レヨリ門前ノ小流ニ^{〔マ〕}込ルノ間ニ梅樹アリ 之ヲ

黄鳥哺ト名ツク 其小流ニ板橋ヲ架シ之ヲ清涼橋ト名ツク

水色青緑ニシテ透徹鏡ノ如シ 小魚遊^{〔空〕}スルヲ見ル 此寺今

ヤ零落シテ荒廢スト雖トモ昔シ井伊氏ノ盛ナルニ当テヤ 随

テ又盛ナリシト云フ 故ニ遊園ヲ作り十勝ト名ツク 今尚ホ

存スル者ハ望岳丘 楓樹林 清涼橋 臥龍桜 黄鳥哺ノ五処

ニ過キス 而シテ尚ホ荒廢ニ属ス 其他照心堂 拈華塔 選

仏場 碧雲閣 松柏壇ノ如キハ皆ナ已ニ破壊シテ見ル可カラ

ス 此日ヤ朝霧甚タ深クシ加フルニ風ナシ 陰々トシテ晴雨

トス可カラス 午ニ近フシテ尚ホ分ラズ 此ニ至ツテ始メテ

晴ル 連日清涼単衣ニテ凌キ難ク此日少シク暑ヲ覚ユ 帰途

世田ヶ^{〔ムシ〕}谷^{〔ムシ〕}中ノ一茶店ニ入り蕎麦ヲ食フ 此店ハ酒屋ニシテ

荒物屋ニシテ味噌屋ニシテ^{〔カ〕}乾物屋ニシテ漬ケ物屋ニシテ八百

屋ニシテ飯屋ニシテ蕎麦屋ナリ 器具ノ美麗ナル実ニ目ヲ驚

カス 余東京ニ来リシヨリ未ダ曾テ如此器ヲ見ザルナリ

蕎麦ヲ盛ル所ノ^{〔空〕}半ハ塗リアリ半ハ木地ヲ生ス 之ニ布ク

所ノ^{〔空〕}ハ竹太クシテ恰モ^{〔空〕}ノ如ク^{〔空〕}ヲ入ル所ノ^{〔空〕}口三個

一様ナラズ茶吸茶椀アリ飯茶椀アリ 而シテ各必ス縁ニ二三

ヶ所^{〔空〕}アリ 只大ナル者ハ染^{〔マ〕}ヲ以テ之ヲ続ク^{〔空〕}貯フル

所ノ土瓶モ亦タ^{〔空〕}アリ 染ヲ以テ続ク 湯ヲ入ルト土瓶モ

亦タ然リ 蓋半片アリ半片壞レ去ル 以テ塵リノ入ルニ任カ

ス 盆モ亦タ朱塗リ半ハ剝ケテ地塗リノ灰色ヲ出ス 諸器総

テ無傷物ヲ用ヒズト云フ 権識自ラ儼然タリ 真ニ盛ナル

哉 老婆客ノ前ニ於テ黒色ノ手ヲ以テ直チニ蕎麦ヲ摘ミ^{〔空〕}

ニ盛ル 蕎麦太細固トヨリ一ナラズ 太サ筆ノ如キアリ細キ

者モ亦タ箸ノ如シ 其味恰モ生醬油ニ湯ヲ和シテ温鈍ヲ食フ

ガ如^{〔ムシ〕}ノ青キ所而已ヲ切ル 長サ五分^{〔空〕}ヲ輪切リニシ

テ椀ニ盛ル 是レ皆ナ薬味ナリ 佃モ亦タ從テ廉ニシテ一椀

僅カニ六厘ナリ 只タ味ノ美ニシテ易ラザル者ハ鶏卵アル而

已 帰途馬牽沢ヲ過ク 馬牽沢ハ今上中下三村ノ名ナリト雖

モ其初メハ一ツノ^{〔空〕}ヲ名ツクルナリ ^{〔空〕}年頼朝奥州征伐

ノ時全軍進シテ此ニ至ル 芦毛ノ名馬ヲ献スルモノアリ 牽

ヒテ此ニ至ルヤ馬俄カニ驚キ沢ニ陥ツテ死ス 其後チ此辺ノ

民芦毛ノ馬ヲ畜ハズト云フ

十五日 朝霧深く午ニ至ツテ晴ル 吉郎三田ニ往キ新聞ヲ

求メ帰ル 薄暮又余家弟ト三田ニ往キ物ヲ求メント欲ス 会

々八幡ノ祭祠 戸々燈ヲ掲ゲ兒童群リ驟キ頗ル雑沓ス

十六日 終日微雨 黄昏望氏来リ宗教ノ事ヲ談ス

十七日 早朝美術学校ヨリ郵書至ル 曰ク 今午前談スル

件アリ 昇校ス可シ 即起テ盥漱シ望氏ヲ伴ヒ出京參校ス

即チ開拓^{〔ムシ〕}物館ノ動物写生ヲ許ス云々 此日残暑^{〔ムシ〕}ニ可ナ
リ 近日ノ比ニ非ス 薄昏市川力大沢^{〔註〕}氏訪ヒ来ル 夜黒ク
路泥ナルヲ以テ長談セスシテ帰ル

十八日 朝雨 午ニ近フシテ晴ル 暑昨日ノ如シ 此夜晴

清 候已ニ秋ナルヲ以テ満天一塵ナク月無クシテ星斗殊ニ爛
然タリ 秋ノ空ノ清ムニ從ヒ虫ノ音モサエ渡リ金風冷ヤカニ
シテ蛙声漸ク衰フ 近頃連日ノ陰天ニテ氣候暮秋ノ如ク螢光
モ亦漸ク絶ユ 而シテ此夜池辺螢光多シ 昨今兩日ノ暑ヲ以
テ又タ生スルト為ス 已ニシテ熟視スレハ樹間ヨリ無數ノ星
光漏テ池水ニ映シ 水ノ動揺スルニ從ヒ飛行スルガ如キモノ
ナリ 嗚呼螢光真ニ已ニ衰ヒ夏モ亦タ已ニ去ル 螢光尚ホ来
年ヲ待テ見ル可シ 今年ノ夏復タ来ラス 年々碌々トシテ冬
夏ヲ送ル 唯タ嘆息ニ堪ヘザル耳

十九日 朝霧甚タ深ク忽チ前山^{〔ムシ〕} 此辺樹木多キガ為
メニヤ常ニ霧アリ 而シテ今^{〔ムシ〕}ノ深キガ如キ事稀ナリ 望
氏ノ父君来^{〔ムシ〕} 余カ横平山激戦ノ^{〔註18〕}圖ヲ覽ントナリ 画末タ
半途ナルヲ以テ近日ヲ期シテ帰ラル 日午ニ近フシテ晴ル
火雲奇峰ヲナン暑サ夏ノ如シ 樹影傾クニ及ヒ望氏来リ堂前
ノ松下ニ於テ戯レニ射ル 晚食畢リ浴シ帰リ棧ニ登レハ日暮
レ遠村燈ヲ張ル 柱ニ倚リ独リ朗吟ス 五郎君来ル 秋虫ノ
燈ヲ見テ入ル者無數

二十日 晴 朝ヨリ霧ナクシテ日光戸ニ入り蟬声未明ヨリ

沸ク 午後門前植木屋ノ娘姉妹相携ヘ其友タル近隣ノ女子四
人ヲ伴ヒ来ル 写真及ヒ画等ヲ見テ種々雑話シ能ク笑フテ帰
ル 之ハ是目黒中ノ美人揃ヒナリト云フ (欄外に「玉 仲
芳 豊 染 佳」とあり) 余東京ノ喧ヲ嫌ヒ避ケテ此山寺
ニ幽居ス 而シテ又タ婦女子ニ俗了セラル 如レ此 此山寺
ニシテ尚ホ此災ヒヲ免カレズ 嗚呼 天下何レノ処カ 此生
ヲ寄ス可キノ地アリ哉 又花園ノ少年来リ終日遊戯シテ帰ル
黒雲東南ヨリ起リ須臾ニ彌蔓シテ前山ヲ過ク 風来テ棧ニ滿
ツ 東坡ノ句ノ如シ 衆以テ驟雨ノ至ルト為ス 已ニシテ風
忽チ変シ雲ヲ捲テ西北ニ去ル 薄暮入浴ス 花園ノ婦湯ヲ汲
テ吾レニ贈ル 田舎ノ湯亭東京ニ異ナル事推シテ知ル可シ
夜望氏来リ宿ス 池上本門寺夜半ノ鐘声聞ユ 以テ明日ノ佳
晴ヲトス

二十一日 晴 早起 東京小石川武氏^{〔註19〕}ニ往キ 家弟秋作^{〔註20〕}兵学
修業ノ事ヲ議シ午飯シテ帰り 新ッ橋外ノ旅寓ニ立チ寄り薄
暮寺ニ帰ル 夜望氏来リ狂歌狂文狂詩ヲ集ムル小冊子ヲ讀ミ
且ツ天文ノ事ヲ談シ 屋ニ登リ天象ヲ窺フ 此夜晴レテ片雲
ナク銀河澄ミ渡リ無數ノ惑星歴々トシテ弁ス可シ
二十二日 佳晴 熟眠シテ明ヲ覚ヘズ 起テ戸ヲ開ケハ日
已ニ午ニ近シ 終日閑暇無事 午後望氏^{〔ムシ〕}来ル 風起ル
二十三日 晴 南風アリ 芭蕉皆ナ折ラ^{〔ムシ〕} 棧ニ入ル殊ニ烈
シ 書籍皆ナ飛フ 因テ南扉ヲ鎖ス 午後三田ニ往キ鬚ヲ剃

ツテ婦^{〔ムシ〕} 夜望氏来り宿ス 閉レ戸読レ書 燈^{〔ムシ〕} 戸隙ヨリ

漏ル 秋虫無数見テ戸ニ聚ル 階前花園ノ中ニ鈴声アリ 以

テ猫児ノ戯ムルト為ス 熟聴スレバ鈴虫ノ楼欄ニ鳴クナリ

二十四日 晴 早朝出京シ学校ニ寄リ教師ノ病ヲ問ヒ 川^{〔註21〕}

上氏ニ至リ 二十七日甲州行ノ事ヲ約シ 先生ノ囑託ニ由テ

帰路飯田町松岡氏ヲ訪フ 松氏昨夜擾騾ノ略ヲ譚ス 昨夜騾

動ノ略松岡氏ヨリ聞ク 先レ是二十三日夜月無ケレトモ星夜

ナレバ能ク晴レ渡リ風モ亦タ静カナレバ 市中ハ常ノ如ク静

穩ニシテ 夜ノ深クルニ從ヒ皆ナ眠リニ就ク 頃ハ十一時過

トモ覺シキ頃 一発ノ大砲響クト齊シク関ノ声遙カニ聞ヘケ

レバ 何ヤラント松岡氏ハ楼ニ登リ四望スレトモ四隣静カナ

レバ 又タ寝ニ就クヤ否ヤ 再ヒ大砲ノ声ト共ニ咄啞ノ声聞

ヘケレバ 如何ニモ不審ニ思ヒ復タ楼ニ登リ四顧スレバ 火

ヲ報スルノ半鐘遠近一時ニ起リ 竹橋ノ方ニ当リ火焰天ヲ衝

ヒテ上リ 人声囂然^{〔ムシ〕} 松氏火ヲ見ント直チニ家ヲ出ツ 是ノ

時ニ当リ非常ノ号砲響キケレバ 在京ノ官員役所ニ詰ル者飛

燈識ルガ如シ 松氏九段坂ヲ登リ掘端ニ往キケレバ 陸軍士

官一人無燈ニテ剣ヲ拔キ往来ニ佇立ス 松氏尚ホ熟視スレバ

鎮台ノ歩兵已ニ銃ニ鎗ヲ装ヒ 路傍左右ノ溝中草陰ニ埋伏ス

土官尚ホ地ヲ撰ヒ指揮シテ配置スルノ際ナリ 松氏驚キ九段

坂ヲ下ラントスル頃 已ニ戦端開ケ鎮台兵ハ狙橋ヨリ川岸ニ

傍ヒ雉橋辺迄 大隈参議ノ邸ヲ狭ミ草陰堤下ニ棋布シ仰キ攻

ム 暴徒ハ近衛兵ノ營後石垣ノ上ヨリ俯シテ発銃ス 丸雨ノ

如ク市民負担奔竄ス 松氏家ニ歸リ尚ホ様子ヲ窺フニ矢丸声

アリ 屋上ヲ過ク 市民門前ニ於テ流丸ノ為メニ傷ヲ負フ者

アリ 三時後ニ至ツテ戦ヒ全ク止ム 事本トヨリ不意ニ出ツ

ルヲ以テ 市街騒擾曉ニ至ツテ斂マラスト云フ 其原ヲ尋ル

ニ客年西南ノ勲章ヲ不平ニ思ヒ 近衛砲兵二百^{〔ムシ〕}名竹橋内己

レ等ガ兵營ノ飼葉小屋ニ火ヲ放チ 二発ノ砲声ヲ号トナシ

上衣ニ紺色ノ冬服ヲ着ケ以テ目標トナシ 宇都宮少佐以下ヲ

殺シ暴発ニ及フ 鎮台兵急ニ各所ヲ戍衛シ 竹橋ヲ囲ンテ攻

撃シ 暴徒鎮滅ス 初メ西南勲章ノ出ルヤ 各隊皆ナ不平ヲ

鳴シ而シテ未タ初スルニ及ハズ 砲兵先ツテ此ニ至ルト云フ

是レ即チ昨二十三夜騒動ノ大略ナリ 詳細ハ新聞紙上ニ載ス^{〔註22〕}

望氏枝豆一籃ヲ抱キ来ル 夜宿ス

二十五日 晴 午後吉郎三田ニ行キ驟雨ニ逢ヒ難渋ス 南

風^{〔註23〕}雨楼ニ入ル 五郎君来ル 晩ニ望氏ト蟠龍寺ニ遊ヒ

学^{〔不明〕}アリ 弁天祠後ノ岩窟ヲ見シ 又転シテ金比羅ノ社ヲ廻

リ帰ル 社前大桜樹アリ又大杉アリ 木製ノ鈍蛙アリ 大サ

野猪ノ如シ 祠下ニ踞ス

二十六日 晴雨相半シ驟雨時ニ至ル 午後目黒ヲ発シ 新

シ橋ノ旅店ニ寄リ 薄暮川上先生ノ宅ニ至リ宿ス 明朝甲州

行アルヲ以テナリ

二十七日 東京ヲ発シ高尾山ニ遊ヒ九月一日ニ至テ帰ル

別ニ紀行アリ〔註4〕 九月一日ヨリ十日ニ〔ムシ〕間各処奔走 其詳細ヲ記ルスヲ得ス 其略ヲ記ス

九月一日 川上氏ニ宿シ 翌二日目黒ノ寺ニ帰ル 弟秋作

来リ宿ス 連日雨アリ帰ルヲ得ス三日滞在ス 是ヨリ先キ画

学教師ホンタネジ〔マツ〕氏病アリ 函嶺ノ温泉ニ浴ス〔註25〕 今月ニ至

リ病漸ク愈テ帰ル 七日昇校シテ面シ且ツ高尾山写生ノ批評

ヲ乞フ 七八兩日目黒村大鳥神社ノ祭祀ニシテ家々燈ヲ張ル

夜望氏ト月ニ乗シ往テ見ル ダシアリ 又店前ニ紅氈ヲ布キ

少婦ノ三弦ヲ弄スルアリ 見ル者市ヲ為ス 恰モ辻講釈ノ如

シ 兩昼夜鼓声絶ヘス 一夕茶間ニ院主日光山庚申山ノ事ヲ

譚ス 院主曾テ屢々彼ノ地ニ遊ヒ頗ル地ノ理ニ詳ナリ 秋已

ニ高キガ故ニ虫声最モ凜ヘ 日没ニ及ヒ堂ヲ繞テ一時ニ沸ク

静カニ聴クニ千声万音其幾〔ムシ〕種タルヲ弁スル能ハス 一夕家

弟等月ニ乗シ之ヲ擒ヒ籠ニ蓄フ 十一日余病アリ 隣〔ムシ〕土塚

氏ヲ招待シテ治ヲ乞フ 十四日病未タ〔ムシ〕快セザレトモ推シテ

東京ニ帰ル 是ヨリ先キ近隣ノ輩果物等ヲ贈ル者アリ 此ニ

至テ尽ク弁償シテ去ル 目黒ニ幽居スル四旬余 而シテ孤寺

ニ寓スルヲ以テ頗ル塵世ヲ超脱シ隱士学仙ノ意ニ適ス 最モ

愛ス可キ者ハ眺望ト清風トナリ 蟬声鳥声蛙声虫声 螢火白

鷺 満庭ノ密芝満園ノ雑花満山ノ老樹満池ノ荷花 是亦々寺

楼ノ有スル所 朝暉夕烟ノ如キニ至テハ千奇万変筆紙ノ尽ス

可キニ非ス 只困ム者ハ夕陽ノ楼ニ入ルナリ 眺望ノ為メニ

楼前ノ樹皆ノ疎ナルヲ以テ 常ニ布ヲ張り之ヲ遮ル 而シテ
食物最モ野ニシテ雅ナリ 其一ニテ拳〔ムシ〕ルニ薙ノ煮付虎耳草ノ
油燐ノ如シ 塵世ニ在テハ未タ曾テ食ハザル者ナリ 而シテ
終日幽静戯レニ景況ヲ述フ 早起戸ヲ開ケハ遠近ノ村落宿霧
未タ晴レズ 翠色空朦 只残星ノ晃々トシテ西ニアルノミ
水村鷄唱〔ムシ〕漸ク分ルニ及ヒ老僧已ニ堂ニ在リ 読経ノ声木
魚ニ和シ朗々トシテ遙カニ聞ユ 棲鴉鳴キ散シ 日出ルニ至
テ炊烟処々ニ登リ 蟬〔ムシ〕一時ニ起ル 朝露珠ヲ連ネ青田尚ホ
湿ホフ 日ノ漸ク高キニ從ヒ雲自ラ奇峰ヲナス 已ニシテ鷄
午ヲ報シ農夫鋤ヲ荷フテ帰ル

〔註〕

(1) 吉 小山の次弟吉郎(一八六〇—一九二九)のこと。工部
大学校造船学科を卒業し、明治期の造船界をリードした一人
である。

(2) 校則 『旧工部大学校史料・同付録』(旧工部大学校史料
編纂会 青史社 昭和五十三年復刻)にはそのような校則を
見ない。

(3) 望氏 望月俊稜のこと。小山と同年。聴香説画館出身。
彼は明治十二年に工部美術学校を退学した。

(4) 松樹山明王院 現在の目黒雅叙園の敷地内にあつたらし
い。『江戸名所図絵 卷之三 天磯部』には、栄えていた頃
の寺が書かれているが『風俗画報』(明治四十四年)の別冊
『東京名所図絵 南郊一之部』には同院が既に廃されたとな

っている。この辺りは名所が多く、現在歩いてみてもおもしろい。しかし小山の記すような、落ち着いた趣はすっかり影をひそめてしまった。

七八ページに明王院近辺の略地図を簡単に示しておく。

(5) 余曾テ幼時 明治元年の戊辰戦争の時のこと。西軍の攻撃から脱出した後、一人板尾の葵谷寺に預けられた、と小山自身「履歴略」にある。

(6) 市氏 市川敬二郎のこと。一八六三年生まれ。彰枝堂出身で小山とは工部美術学校同級生である。

(7) 川上先生ノ居 下谷御徒町にあった住居のことである。

(8) 松望 松岡寿、望月俊稜のこと。松岡寿は一八六二年生まれ。聴香読画館出身。

(9) 浅山 浅井忠、山口彦二郎のこと。浅井は一八五六年生まれ。彰枝堂出身。山口彦二郎は一八五六年生まれで農業修行の為明治五年より二年間ペリに留学していた。やはり、工部美術学校生である。

(10) 諸葛草慮ノ想 三国時代、蜀の劉備が自分で三度も諸葛孔明の宅を訪れて、その出馬を請うたという故事がある。「三顧臣於草慮之中。」

(11) 大鳥雛子 工作局長・工部大学長大鳥圭介の娘。一八六一年生まれ。工部美術学校には開設の一ヶ月後に、山下りん、神中糸子、秋保その等と共に入学。

(12) 浦市敬二氏 浦井韶三郎、市川敬二郎のこと。浦井は一八六〇年生まれ。聴香読画館に入った後、五姓田義松に就き共に工部美術学校に入学。

(13) 東坡ノ雨 北宋を代表する詩人蘇東坡の詩「飲湖上初晴後雨二首」のこと。第二首だけ記して置く。

水光激 晴方好

山色空濛雨亦奇

欲 西湖比西子

淡粧濃抹總相宜

激 はさざ波をたたえた様子、西子は春秋時代の越の美女、西施のことである。東坡の詩には小山好みであったような風景がある。

(14) 劉敞 北宋時代の学者、公是と号す。博覧多識、公是集を著す。

(15) 其法名ヲ取り 一六五九年に没した井伊直孝の法名は、「徳は豪れ天の英は久しく昌る」という意の「久昌院豪徳天英」であった。

『戒名・法名・神号洗礼名 大事典』（鎌倉新書）参照。

(16) 頼朝奥州征伐ノ時 一一八九年（文治五）。

(17) 市川力大沢両氏 一人は市川力蔵のこと。市川は一八五八年生まれ。国沢新九郎の門人で工部美術学校は十二年に退学した。大沢については不明。

(18) 横平山激戦ノ図 残念ながら、これについては不明。

(19) 小石川武氏 姉の夫武昌吉のこと。

(20) 家弟秋作 小山の三弟（一八六二〜一九二七）。陸軍士官学校を卒業して参謀本部に出仕した。退役後は南洋方面の開発・貿易振興に従事した。

(21) 教師ノ病 脚氣に罹っていたフォンターネジのこと。

(22) 甲州行ノ事 八月二十七日より、川上冬崖に従つた小山、松岡、千葉真楯、望月の高尾山行きの事。

(23) 明治十一年八月二十三日夜十一半頃起きた竹橋騒動。結果的に約五十人もの死刑者を出した大きな暴動であった。

余談として、五姓田義松にもこの日の日記が残されている。前出『油絵初学』参照。芝居を観に行っていたという五姓田の記述に較べて、外まで飛び出して様子を伺っていたという松岡の方がおもしろい。又その話を聞き詳細を書き留めているのが、小山らしい。

(24) 別に紀行アリ 「高尾山漫遊日記」に記されている。他の日記に較べて破損が多く、今回私は取り上げられなかった。小山はいつもの様に行先で水車を見付けたりして、この小旅行を楽しんでいたようである。しかし神田橋外の馬車会社より皆で馬車で出発したというこの旅行は、先生が一緒だった為か小山の他の紀行よりも「大人しい」印象をうける。日記の最後のまとめ方も他のものとは違つたように感じる。その部分を次に引いておく。

四年ノ間ニシテ而シテ変換スル如斯 知ラズ明年又タ何
レノ処ニ在ルヲ 然レハ則チ再ヒ此ニ遊フモ未タ必ス期
ス可カラズ 此ニ由リ之ヲ想ヘハ今日ノ漫遊モ亦タ以テ
記無カル可カラズ 因テ聊カ歲月ヲ紀シテ後笑ニ備フ

(25) 函嶺ノ温泉ニ浴ス フォンタネージは九月三十日付けで工部美術学校を正式辞職する。その約一ヶ月前、彼は脚氣と思われる病を癒す為に、「毒気のある」東京を離れて温泉に行つていた。来日以来来悩んでいた体の不調ももう限界だったの

ではないか。

(26) 余病アリ 小山の「病床日記 明治十三年 春日」(未刊)に記録が有る。八年から十三年迄の病気の記録であるがその大略を書いておこう。

八年 雁瘡を患い、医学校病院に入院。夏、二ヶ月程、函

嶺温泉にて療養。

十一年 春、虎の門外の客舎にて胃を病む。夏、目黒山寺に

て又胃を病む。

十二年 春、今川小路の居にて胃を病む。

十三年 一月、腹膜炎に罹る。

小山はどうやら胃が弱かった様である。

この日記は、縦十行の野紙を閉じた和紙(縦220・横145 (mm))に書かれている。この冊子には他に「国府台夜遊記」・「子仏嶺近傍探景日記」・「履歴略」(二種未刊)・「高雄山漫遊日記」(未刊)が収められていて、それらも合わせると六十四丁になる。冊子の表紙には「明治十一年 春三月□流」、「明治季間略履歴」、「避喧幽棲日記」の三行が見える。「避暑字静日記」はつまりその「避喧幽棲日記」に当たるものである。

国府台夜遊記

余常ニ社員ニ謂テ曰ク 我国ノ画家皆ナ柔弱ニシテ事ニ堪

へズ 左媚右語僅カニ口ヲ糊ス 実ニ恥チザルノ甚キナリ
是レ從來ノ弊風深ク議スルニ足ラズ 独リ吾輩ノ集ル所ハ切
磋琢磨勉メテ一世有用ノ人物ヲ育成シ 以テ國家ノ大益ヲ起
サント欲スル所ニ非スヤ 而シテ若シ吾門ニシテ如レ此ノク
ノ人ヲ生セバ 徒ニ國家ニ益無キ而已ニ非ス又タ恥ツ可キノ
至リナリト 衆之ヲ然リトシ 相共ニ皆ナ此意ヲ以テ門下ニ
教ヘ 從來ノ弊風ヲ一洗セント欲ス 乃チ運働ノ時ヲ定メ門
生^{〔ムシ〕}□□□□劍角舩以テ身体ヲ強壯ニシ精神ヲ活潑ニセ^{〔ムシ〕}己
レ等モ亦タ讀書遊歴擊劍角舩 以テ天性ノ英氣ヲ鼓舞ス 今
茲八月朔 社員南樓ニ会シ社事及ヒ生徒ノ優劣ヲ論シ談此事
ニ及フ偶々月樹間ニ昇リ影樓ニ入ル 高橋源吉郎曰ク^{〔註2〕} 如レ
此キ明月空ク看過ス可カラズ 且ツ身体ヲ鍛練シ國家非常ノ
用ニ供セント欲スル事 諸君ノ志ナリ 今夜之ヨリ国府台ニ
傲遊ス可シ 衆曰ク 可ナリ 而シテ時已ニ遅キヲ以テ明夜ヲ
期シテ別ル 翌八月二日 夜將二三更(この欄外に「十時」
とあり) ナラントシ 月已ニ出ツ衆皆ナ行装ス 或ハ麵包ヲ
腰ニシ或ハ団飯ヲ負ヒ^{〔註3〕} 或ハ洋酒ヲ携フ^{〔フランドイ〕} 余渾木ヲ杖ニシテ出
ツ 途ニ兵庫ノ人松井昇鹿兒嶋ノ人山口彦二郎ノ旅寓ヲ訪ヒ
之ヲ誘フ 松井葡萄酒ヲ携ヒ山口一瓢ヲ腰ニス 皆ナ傲然英
氣アリ 柳原ヲ過キ二州橋ヲ渡リ本所ヲ過ク 亀戸天満宮ノ
祭祀ニ会シ戸々燈ヲ張ル 巡查吾輩ヲ尾シテ来リ 逆井ノ渡
リニ至リ吾輩ヲ越エテ先ツ渡ル 東岸ニ巡查ノ見張所アリ

吾輩ノ岸ニ上ルヲ待チ数名ノ巡查我住所姓名ヲ問フ 頗ル小
細ナリ 先キニ尾シ来ル所ノ巡查モ亦其中ニ在リ 是レヨリ
市川ニ至 道路□坦只処々ニ小橋アル而已 時ニ夜已ニ半ナ
リ(この欄外に「十二時三十分」とあり) 往來人跡□^{〔ムシ〕} 稻
□里路ヲ挾テ蛙声アリ 各村燈ヲ見ス 実ニ寂々寥寥 行五
六町遙カニ人アリ至ル 吾輩ノ往クヲ見 俄カニ折レテ南シ
田間ニ潜ミ我過ルヲ待チ又出テ行ク 蓋シ時已ニ遅キヲ以テ
我輩ノ何人タルヲ詳カニセズ 懼レテ避クル者也 田間ニ小
橋アリ 四望寥然 吾輩就テ憩フ 或ハ団飯ヲ食ヒ或ハ酒ヲ飲
ム 談論顧ミル所無シ 又民家ニ入り水ヲ飲ム 時ニ伝染病
ノ流行スル時ナリ 乃チ健胃苦酒ヲ混和シテ飲ム 且ツ吟ジ
且行ク 又道ノ中央ニ草ヲ乾ス所アレバ輒チ憩フ 市川ノ渡
リニ至リ 夜正ニ二時ナリ 東岸堤上ニ草ヲ籍キ坐シ或ハ臥
ス 是レ鴻ノ台ニ上ルニ人跡稀レニシテ雜草路ニ蒙リ 路無
キガ如シ 僅カニ草ヲ開エテ而シテ行ク 草露衣ヲ湿ホス
老杉路ヲ挾テ天ヲ覆ヒ月暗ク星稀レニシテ^{〔空白〕}□□□□□□^{〔空白〕} 実ニ人
ヲシテ^{〔空白〕}□□□□□□^{〔空白〕}セシム 行ク三四町寺ニ至ル 時ニ兵乱ノ後僧
去テ已ニ十二年 寺中山門鐘樓ノ如キ皆ナ頽敗シ 境内ノ鋪
石モ亦皆ナ壞レ 雜草繁茂シ狐兔ノ路交ル 只庫裡ノ一隅而
已巍然トシテ独リ存ス 然レトモ柱傾キ壁剝チ^{〔ムシ〕}□僧ノ僅カニ
此ニ宿スルアリ

〔註〕

この記は、小山の「履歴略」(未刊)により、明治十二年八月のものであると思われる。同行者は高橋源吉、望月俊稜、岸上操、西敬で途中から松井昇と山口彦二郎が加わった。

(1) 小山たち九名が明治十一年十一月に設立した結社「共立画学校」の社員を指す。

(2) 高橋源吉郎 高橋源吉或いは柳源吉。高橋由一の長男として一八五八年生まれる。工部美術学校を退学してからは、小山や浅井忠らと十一会の結成に参加している。

(3) 松井 昇 一八五四年〜一九三三年。明治二年冬崖の聴香読画館に入塾。同十三年頃、十一会に加わった。

小仏嶺近傍探景日記

明治一二年九月二日 高橋浅井二君ト今川小路ノ寓居(註)ヲ発ス 神田橋外ヨリ馬車ニ乗リ八王子ニ向フ 是日天気晴朗塵埃不起 遊興正ニ濃カナリ 府中ニ至リ午飯シ 又馬車ニ乗リ発シ 午後三時八王子ニ達ス 神田橋ヨリ八王子ニ至ルノ道路ハ 昨年高尾山紀行中ニ記セルヲ以テ略ス 八王子ヨリ人力車ニ乗リ 焦沢橋(註)ニ至ル 焦沢橋ハ溪流ニ架スル一小橋ニシテ人呼テ小猿橋ト云フ 是ヨリ山ニ掛レハ坂而已ナルヲ(註) 旅人多ク此レヨリ車ヲ下ル 吾等モ亦是ヨリ(註)ス 小仏駅ノ一茶店ニ小休シ 宿泊所ノ遠近ヲ問フ 婢曰ク 此ヨ

リ一里許嶺頭ニ至レバ旅人宿アリト 吾等大ニ安心シ朗吟緩歩ス 行ク三四町 街道ヨリ少シク左折シ瀑布アリ 法隆ノ滝ト云フ 行テ見ル 高浅二君浴ス 余独リ風邪ノ故ヲ以テ浴セズ 旅宿ノ遠カラザルヲ知り山ノ中腹ニ至リ屢々休フ 願望スレバ翠色一带天末ニ横リ 前ニ過ル所ノ道路山間ヨリ歴々弁ス可シ 曰ク小仏曰ク駒木野曰ク小名字曰ク河原ノ宿 彼レハ八王子ナリ此ハ高尾山ナリナド指点談笑ス 法隆ノ滝ナド已ニ脚底ニ沈ミ脚下ニ人ノ行クヲ見ル 又種々ノ花ヲ摘シ帽ニ挿シナドシテ戯レ行ク 故ヲ以テ日暮レ稍ク嶺頭ニ至ル 嶺頭ニ旅人宿三四軒アリ 然レトモ皆ナ不潔宿ス可キ無し 旅人路傍ニ於テ入浴ス 以テ其景況ヲ見ル可シ 乃チ已ムヲ得ス茶一碗ヲ喫シ嶺ヲ下ル 時已ニ昏黒色ヲ弁セス 此嶺麓ニ至ルマデ喬木無ク眺望最モ佳シ 甲相ノ連山 山又山重々翠色ヲ呈ス 実ニ純粹ノ「インジゴ」ナリ 山径左右樹無ク雜草繁茂スルヲ以テ虫声路ヲ挾テ沸ク 最モチンチロリン多シ 漸ク麓ニ近ケバ翠黒朦朧ノ中(註) 処々炊烟ノ昇ルヲ見ル 山腰ニ二茶店アリ 小犬吾ヲ見テ吠ユ 又下ル三町許茶店二軒溪流ヲ挾テ相對ス 景最モ佳シ 然レトモ日暮ルヲ以テ写サズシテ去ル 是ヨリ与瀬駅ニ至ルノ間皆小山 或ハ上リ或ハ下ル 山間処々遠村ノ燈ヲ見ル 月漸ク山腰ニ出テ清輝樹ヲ漏レ来ル 時ニ陰曆七月一六日ニ属ス 故ヲ以テ月色明朗 衆皆ナ喜ヒ疲レヲ忘テ行ク 或ハ吟シ或ハ歌フ

小原駅ニ至リ駅口ノ小茶店ニ小休シ与瀬駅旅人宿ノ善悪ヲ問フ 此辺茅屋皆ナ巨大ニシテ二階家ナリ 広構人ヲシテ昔時ノ大夏政庁モスクヤト想ハシム 此ヨリ又坂路ヲ昇降シ行クニ左右桑畑ニシテ虫声ノ宜シキアリ 又喬木路ヲ挟ミテ樹下溪声ノ聞ユルアリ 皆京市ノ無キ所ニシテ 殊ニ月夜ナレバ一層人心ヲ洗滌ス 与瀬ニ至リ逆旅小林ニ宿ス 盲人ヲ雇ヒ按摩セシム 逆旅ノ婢ヲ呼ビ 砂糖ヲ買ハシムルニ赤キモノ而已ニシテ白キ者ナシ 翌三日早起スレバ時已ニ初秋ニ属スルヲ以テ漸ク冷氣ヲ覚ユ 余ハ幸ニ襦半ヲ着シタレバ左マデニ困シマズ 駅ノ南口ヨリ左折シテ下ル事三町許リ 川岸渡頭ニ出ツ 此川ハ即チ相州馬入川ノ源ニシテ 水色正緑透徹如鏡 左右砂礫多ク都テ玉川ノ大ナル者ノ如シ 之ヲ渡リテ渡頭ノ砂礫ニ揚ヲ立テ休フ 顧ミ見ルニ四面皆ナ山ニシテ与瀬駅小原駅ノ如キモ此ヨリ見ルトキハ皆ナ山腰ニシテ 所謂甲府街道ナル者ハ山腰ヲ繞リ匯リテ行ク者ノ如シ 麓ヲ繞リ行クトハ云ヒ難キナリ 山色重々トシテ一層毎ニ漸次ニ翠色ヲ帯ヒ 遂ニ純粹ノ「コバルト」色ニナリテ雲ニ入ル 其ノ間人家樹林点々山ヲ装ヒ 粉壁瀑布等往々白色ヲ呈シ 実ニ盆池ノ如ク屏風ヲ連ネタル如シト古人ノ賞セシハ 遙カニ言ヒ及ハザルナリ 此ヨリ又行クニ 遙カノ川岸ニ旅人二人休テ景ヲ写スモノヲ見ル 皆曰ク守住君ナリト 又曰ク五姓田氏ノ門生ナル可シト 近ツキ見レバ景ヲ写スニ非スシテ

草鞋ノ緒ヲ結フ者ナリ 此ヨリ久保沢駅ニ至ル 皆坂路ナリ或ハ登リ或ハ下ル 登レバ必ス桑畑下レバ必ス溪流アリ 津久井郡役所ノ前ヲ過キ行ク 此辺少シク茶店アリ 然レトモ皆不潔且旅人多ク飯スルヲ以テ食セズシテ行ク 空腹ナレトモ食ス可キ店ナシ 則チ餅ヲ食フ 先レ是道志川ヲ渡ルニ此川ハ相模川ノ支流ニシテ亦タ玉川ノ如シ 童子裸体渡船ヲ漕ク 渡船駄馬ヲ乗ス 旅人白衣ヲ着キ之ニ騎ル等 景色最モ美ナリ 浅高二君〔以下欠〕

〔註〕

- (1) 今川小路ノ寓居「病床日記」(明治十三年、未刊)の裏表紙に「明治十有三年三月上流作之 余時寓于神田今川小路二丁目十二番地 越前一寒生山正」とある。当時の今川小路二丁目とは、現在の西神田二丁目辺りである。
- (2) 焦沢橋 焦沢とは八王子から小仏へ向う途中にある小下沢のことである。

- (3) 守住君 守住勇魚のこと。一八五四年生れ。幼年より父守住貫魚に住吉派を学んだ。彰技堂出身で、工部美術学校は十一年に退学。

- (4) 五姓田氏 五姓田義松(一八五五年生れ)のこと。チャールズ・ワーグマン唯一人を師としていた彼は、工部美術学校教師フォンタネージのもとには、明治十年迄しか在籍していない。それにしても、この時代路傍にたたくむ人は、絵画きか草鞋の緒を結ぶ者だけだったのだろうか。